

テゼのヨーロッパ大会が、初めてベルリンで開催されます。ベルリンは豊かな多様性を特徴とする都市です。未来に開かれた都市であると同時に、痛みを満ちた過去の記憶をそこに寄り添わせようとしています。そしてこの都市の人々は、困難な状況にも決してあきらめないことを証してきました。

キリスト者は少数派ですが、福音を生き抜こうとしています。属する教派はさまざまでも、そこには共通する証(あかし)と教派を超えた(エキュメニカルな)結びつきがあります。それらは、選択肢のひとつというのではなく、そうでなくてはならない必要性からきています。多くの教会や集会は、貧しい人が歓迎される人間の連帯の場となっているのです。

テゼのブラザーたちがベルリンを最初に訪問したのは、1955年のことでした。この都市をふたつに分断する壁が1961年に建てられたとき、ブラザーたちは東ベルリンへの訪問の回数を増やしました。そして、そこで多くの祈りのグループが、80年代に生まれました。ブラザー・ロジェは1986年に「信頼の巡礼」のひとつとして、東ベルリンを訪問しました。祈りの集いを開催するためには、共産党政権に許可を求めねばなりません。その集いは、ふたつの大きなカトリックとプロテスタントの教会を会場に同時進行で開催され、東ドイツから6,000人の若者が集まりました。しかし当局から与えられた許可には、西側からはだれも参加しないという条件がありました。今そのような時代は終わり、ベルリンは、世界中で、信頼を広げるために分断の壁を乗り越えようとする者すべてのシンボルとなりました。

家庭で、共同体で、そして町や村の中で、あらゆるレベルで、人間同士の新しい連帯が生まれるために、勇気のある決断が求められています。¹

人類とこの地球に重くのしかかる危険と苦悩を思うとき、恐れとあきらめに屈したくないのです。²

しかし一方で、人間の尊い希望は、幻滅感に絶えず脅かされています。ますます重荷となる経済的な困難、ときに飲み込まれそうなほどの社会の複雑さ、自然災害に直面して実感する無力さ、これらは、新しい希望の芽を摘んでしまおうとするのです。³

連帯の新しいかたちを創りだすことを求めて、信頼の源泉を見いだすためにより大きな努力を尽くすべきときが来たのではないのでしょうか。

¹ 人々の連帯はどんなときも欠くことができませんでしたが、それは新しい仕方で表現されることによって、絶えず刷新され、もう一度若い息吹が注がれる必要があります。今日、おそらく今までのどんな時代にもまして、国家の間やそれぞれの国の中で、地球の資源をより公正に分かち合い、富を公平に分配するために、若い人々が動きだすことが不可欠となっています。

² 新しい連帯へと向かう力を得ることは、必ず可能です。その力は、世界の歴史は決して前もって定まっているわけではないという確信によって育まれます。いくつか例を思いだしてみよう。第二次世界大戦の後、少数の政治指導者は、希望なき状況で希望し、和解の可能性を信じて、ひとつの連帯したヨーロッパを勇敢に築き始めました。1986年、平和的な革命が、フィリピンで大きな変容をもたらしました。ポーランドの大衆運動「連帯」は、暴力によらずに、いくつかのヨーロッパの国に自由への道を整えました。1989年のベルリンの壁の崩壊は、その数年間にはまったく想像できないことでした。その頃、ラテンアメリカの国々は民主主義への道を進みだし、夢にも思わなかった経済発展が始まりました。そこでは、最貧の人々が後回しにされることなくその恩恵にあずかることが望まれます。南アフリカではアパルトヘイトの終焉とネルソン・マンデラが差し出した手が、すべての人が望んでいた以上の和解をもたらしました。そして最近では、北アイルランドとバスク地方で政治を巡る暴力の終結をわたしたちは目撃したのです。

³ 世界経済の大変動は、わたしたちに問いを投げかけます。地政学的な勢力の均衡に変化が生じ、不平等が増長しています。昨日の安定が、今日もはや続くとは限らないということが明らかになりました。これらの事実は、生活で何をどのように選択すべきか、わたしたちがもっと見つめなおすべきであると伝えているようです。

テゼ共同体の院長、ブラザー・アロイスによって書かれたこの手紙は、24のアジアの言語を含む55の言語に翻訳され、2011年12月にドイツのベルリンで開催されたヨーロッパ青年大会において公表された。

この手紙は、2012年の年間を通じて、テゼで開かれる毎週の集いや世界各地の集いで、黙想のためのテキストとして用いられる。

テゼからの手紙

No. 274 特別号

LETTER 2012

新しい連帯に向かって

どんな人間も、どんな社会も、信頼なくしては生きることができません。

信頼が裏切られたとき、それは深い傷跡を残すのです。

信頼というのは、分別がなく騙されやすいということではありません。また、信頼は決して安易な言葉でもありません。それは、選択の結果であり、内なる葛藤の実りです。わたしたちは、もう一度、心配を置いて信頼へと歩みだすようにと日々招かれているのです。

人と人との信頼

信頼の道を開いてゆくことが、差し迫ったひとつの課題に応えます。それは、コミュニケーションがますます容易になってきた一方で、人間の社会はさらに細分化され、分裂したままだという課題です。

壁は、人々や国々の間に存在するだけでなく、わたしたちの身近なところに、わたしたちの心の中にさえ存在しています。異なる国々の人々が抱く互いへの偏見について考えてください。移民のことを思いだしてください。これほど近くにいるのに、しばしばとても遠い存在になっている人々です。宗教はいまだに互いについて無知なままで、そしてキリスト者自身も、実に多くの教派に分かれています。

世界の平和は、わたしたちの心の中から始まります。

連帯の道を歩きだすためには、他の人に向かってゆく必要があります。ときには、差し出せるものが何もなくても、その空の手で、その人に耳を傾け、自分とは考え方が同じでない人を理解しようとするのです。そのとき、行き詰まった状況が、すでに変容されているということがあってもいいかもしれません。

もっとも弱い人々に、仕事を見つけることのできない人々に、心を向けるのです。もっとも貧しい人に心を向けることは、何らかの社会活動に参加することによって表すことができるかもしれません。またそれは、さらにより深いところで、すべての人へと心を開いてゆく姿勢となります。そして、身近な人々もまた、ある意味で、わたしを必要としている貧しい人なのです。⁴

貧困と不正義に直面するとき、中には暴動を起こしたり、ときには手当たり次第の暴力に駆^かられたりすることがあります。暴力は、社会を変える道とはなりません。⁵ しかし、その背後の根本的な理由を理解するために、^{いきどお}憤りを示す若者たちに耳を傾ける必要があります。⁶

新しい連帯へと向かう力は、深いところに宿る確信によって育まれます。その確信のひとつは、分かち合うことの必要性です。⁷ これは、異なる宗教の信者たち、そしてさらに信者と信仰をもたない人々とを結び合わせるができる緊急な責務なのです。

神への信頼

人間同士の連帯は、神を拠^より所とするときに、確かな土台を見いだすことができます。そうでありながらも、しばしばこの神への信頼に対して疑問が投げかけられます。多くの信者が、それぞれの仕事や学びの場で、そして時には家庭において、そうした否定的な経験をしています。

一人ひとりを愛される神、その神を信じることができない人々がたくさんいます。また、ごく正直に次のような問いを投げかける人もたくさんいます。「自分に信仰があるかどうか、どのようにして知ることができるだろうか。」
今日、信仰はリスクのように思われているようです。信頼することのリスクです。

⁴ 貧困とは、物質的な貧しさではありません。友がいないこと、人生の意味が見いだせないこと、詩、音楽、芸術などの豊かさ——創造の美に目を開かせるもの——に接する機会がないこと、これらも貧しさなのです。

⁵ 1989年、ベルリンの壁の崩壊の前夜に東ドイツで行われた街頭デモで、主催者は一本のキャンドルに灯りを点して持つように皆に呼びかけました。片方の手でキャンドルを持つと、もう片方の手で灯りを風から守らねばなりません。そのようにしてその両手が暴力に走ることはありませんでした。

⁶ マドリードの「インディグナドス(怒れる人々)」という運動に関わるスペイン人の若者は、こうわたしに書いてきました。「状況が好転しなければ、何が起きてもおかしくありません。多くの人々が失業し、住居や基本的人権を失いつつあります。不公平な法制度や経済・社会システムのゆえに、そして憲法に記された市民の権利を保障しない偽りの民主主義のゆえに、多くの混乱と怒りがあります。憲法には、適切な住宅や身体と精神の尊厳が謳(うた)われているのです。あなたは、テゼがわたしたちのために何ができるかと尋ねてくれました。そして、これがわたしたちの答えです。どうか皆さんがすでに行っていることを続けてください。内なる平和をどのようにして保てばよいのかを示してください。皆さんの祈りと、今まで示してきてくださった愛情すべてを、わたしたちは必要としています。そして、同じような関心をもつ他の青年たちと情報を共有できるよう助けてください。」

⁷ たとえば、西洋諸国は、アフリカ大陸で正義が確かなものとなるのを希求するほどには、アフリカへの人道的支援を行う必要性を感じていないようです。このことはハイチなどの国々に対しても当てはまります。ハイチの人々は、深い尊厳と豊かな信仰を生きる人々ですが、歴史上もっとも不当な扱いを受けて屈辱を味わっている人々です。

何よりもまず、信仰とは、真実にこだわるのではなく、神との関係です。⁸ 信仰は、神の光に向かって歩みだすようにとわたしたちを招きます。

追従させ、わたしたちの自己実現を抑えつけようとするのでは決してなく⁹、神への信仰はわたしたちを自由にするのです。——それは、恐れからの自由、神がわたしたちにゆだねておられる人々のために働く人生に向かう自由です。¹⁰

神への信頼が育まれるにつれて、わたしたちの心はますます広がってゆきます。——世界のあらゆる場所、あらゆる文化の人々をすべて包みこみながら。わたしたちの心はまた、苦しみを軽減し、社会を前進させる可能性を持つ科学・技術を迎え入れることもできるようになります。

太陽がそうであるように、神もまた、あまりに眩^{まぶ}しすぎて、直接目にすることができません。けれども、イエスが神の光の輝きを伝えてくださいます。聖書は一貫して次のような信頼へとわたしたちを導いています。——絶対的な超越者である神が、わたしたち人間の現実のただ中に入り、そして理解できる言葉で語りかけておられるという信頼。

キリスト教の信仰の特徴とは何でしょうか。それは、人としてのイエスであり、そのイエスとの生きた関係です。わたしたちがこのことを完全に理解し尽くすということは、決してないでしょう。

コミュニオン 交わりのキリスト

わたしたちは皆、巡礼者であり、真理の探求者です。キリストを信じるということは、真理を手に入れることを意味しません。そうではなく、真理そのものであるキリストがわたしたちを捉えてくださるままに任せ、それが完全に明らかにされるときに向けて歩んでゆくことです。

今も、またこれからも、驚くほどにまったく新鮮であり続けることは、イエスが神の光を単純素朴な生活を通して伝えられたということです。イエスの神聖さが、よりいっ

⁸ 教皇ベネディクト16世は、個人的な神との関係が信仰の土台であるということとを、これまで何度も強調してこられました。例えば、彼は次のように記しています。「人をキリスト信者とするのは、倫理的な選択や高邁(こうまい)な思想ではなく、ある出来事との出会い、ある人格との出会いです。この出会いが、人生に新しい展望と決定的な方向づけを与えるからです。」(教皇ベネディクト16世『神は愛』序文、第1項)

⁹ わたしたちの信仰は、いつの間にか植えつけられた否定的な考えや恐れから絶えず浄化されることが必要です。——時として、疑いと信頼が交錯する内なる葛藤を通して。このせめぎあいには判断する心が加わり、それは単なる機械的な学びに納得しません。だからこそ、今日(こんにち)多くの若者は、ただ教会の伝統を引き合いに出すだけでは満足しないのです。つまり、彼らの中で、信頼という信仰がたちあがるには、個人的な関わりと確信とが不可欠なのです。

¹⁰ 「わたしは、誰に対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。」(コリントの信徒への手紙一 9:19)という使徒パウロの言葉に言及して、マルティン・ルターは次のように記しています。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、だれにも従属していない。キリスト者はすべてのものに奉仕する僕(しもべ)であって、誰にも従属している。」(ルター『キリスト者の自由』)

そうイエスを人間そのものにしました。¹¹ 人間の生活の単純素朴さの内にご自身を十分に現すことによって、神は人間への信頼を新たにされ、またわたしたちも人を信じることができるようにしてくださいました。それ以来、わたしたちは世界に対しても自分自身に対しても、もはや絶望してはいられないのです。

暴力に暴力で立ち向かうことなく、その暴力的な死を受け入れることで、イエスは憎しみしか存在しないところに神の愛をもたらされました。¹² イエスは十字架の上で、そういう運命なのだ^{あきら}と諦めることも、受身でいることも拒まれました。イエスは、その息を引き取る最期まで愛しぬかれました。不条理、そして理解できないような苦しみに置かれながらも、イエスは、神が悪より偉大であること、死がすべての終わりでないということに信頼し続けられました。そうして逆説的に、イエスの十字架上の苦しみの、限りない愛の徴^{しるし}となったのです。¹³

そして、神は死人の中からキリストを引き上げられました。キリストはただ過去の人というのではなく、新しい一日一日、わたしたちのためにこの場におられます。さらに、キリストは聖霊を送ってくださいます。そして、その聖霊によって、わたしたちは神ご自身の命とともに生きることができます。

わたしたちの信仰の中心は、復活のキリストです。そのキリストは、わたしたちのただ中に現存し、一人ひとりと個人的な愛の絆を結んでおられます。キリストに目を向けることによって、驚嘆の心とわたしたちの存在への深い理解が呼び覚まされます。

¹¹ イエスは、この世から離れた偉大な行者ではありません。たしかにイエスは奇跡、とりわけ癒しの業を行われましたが、ご自分が神によって遣わされた者であることを証明することができただろう決定的瞬間にあって、十字架上で、神の沈黙がありました。——それは、苦しむ人が皆知っている沈黙。そして、イエスがともに引き受けてくださった沈黙。使徒たちにとって、イエスが貧しく弱い救い主であることを理解することは困難なことでした。彼らは、イエスが当時の社会的・政治的な状況を変えてくださることを望んでいたかもしれませんが、使徒たちは、イエスが、何よりもまず、根本から悪を取り去るために来られたのだということに気付いていませんでした。

¹² 「ののしられてものしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。」(ペトロの手紙一 2:23)

¹³ 無実の人々の理解できない苦しみに直面するとき、わたしたちはしばしば途方に暮れます。そして、人類の歴史に一貫して何度もこだまする疑問が、叫びが、わたしたちの心に触れます。——神はどこにいるのか、と。すぐに得られる答えはありません。しかし、わたしたちは、死に打ち勝ち、そしてわたしたちの苦しみのうちに共にいてくださるイエスに、自らをゆだねるのです。

祈りの中で、キリストの光にまなざしを向けるとき、その光は、わたしたちの内側で次第に輝きはじめます。キリストの神秘が、わたしたち自身の命の神秘となるのです。わたしたちの内なる葛藤と恐れは、完全に取り去ることはできないかもしれません。しかし、わたしたちが自らについて思い悩ませているものの内に、キリストは聖霊を通して、その身をすべておいてくださり、そのようにしてわたしたちの闇に光が照らされます。¹⁴

祈りはひとつです。それは同時に、神に向かい、そしてこの世に向かいます。

復活の日の朝、生きていたキリストに再会したマグダラのマリアのように、わたしたちはこの良い知らせを人々と分かち合うようにと招かれています。¹⁵

教会の使命は、世界中のあらゆる言語、あらゆる国々の女性、男性、そして子どもたちをキリストの平和へ招き集めることです。教会は福音が真実を語っていることの徴であり、聖霊によって命の息吹を与えられたキリストの体^{しるし}です。教会は、「^{コミュニオン}交わりのキリスト」を現存させるのです。¹⁶

教会がたゆむことなく耳を傾け¹⁷、癒しの業に仕え、そして和解に生きるとき、教会はその本来の姿をもっとも豊かに光輝かせます。——それは、愛、憐れみ、そして慰め^{コミュニオン}の交わり、復活されたキリストの澄みきった映し。決して距離をおくことなく、決して守りに立つことなく、あらゆる^{かたく}頑なさから解き放たれた教会。単純素朴に信仰により頼む、その教会の姿から光が輝き出し、それは人の心にまっすぐ射し込むのです。¹⁸

¹⁴ 「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」(ヨハネの黙示録 3:20)

¹⁵ ヨハネによる福音書 20:11-18 を参照。

¹⁶ 「交わり(コミュニオン)のキリスト」は、ブラザー・ロジェの表現のひとつです。同じように、ベルリン出身の神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーは、とても若く 21 歳のときに、「共同体として存在するキリスト」という表現を生み出しました。彼は次のように記しています。「キリストを通して、人類は神との交わり(コミュニオン)のうちに真にひとつとされるのです。」(ボンフェッファー『聖徒の交わり』)

¹⁷ 教会のどこであって、耳を傾ける奉仕をしたいという人々がいるなら、傾聴の働きを実践することができます。任を受けた聖職者の働きを補うものとして、このような傾聴を行うことができる一般の信徒がいます。

¹⁸ ブラザー・ロジェ『信頼への旅—内なる平和を生きる 365 日の黙想』

今後予定されている 「地上における信頼の巡礼」

様々な国の青年たちのグループとともに、ブラザー・アロイスは世界教会協議会(WCC)を訪問するため、2012年3月2日(金)にジュネーブへ行きます。

アフリカで3度目の青年大会が、2012年11月14日から18日にルワンダのキガリで開催されます。

第35回青年ヨーロッパ大会が2012年12月28日から2013年1月2日にかけて行われます。開催地は、ベルリンで発表されます。

ブラザー・アロイスは、2013年1月4日から6日に、コンスタンチノーブルのエキュメニカル総主教であるバルトロメオ1世およびイスタンブールのキリスト者と主の公現の祝日を祝うため、他のブラザーや様々な国から集まった若者とともに、イスタンブールを訪れます。

ベルリン大会のために寄せられたメッセージ:
<http://www.taize.fr> をご覧ください。

「地の塩」となるように

コミュニケーション
交わりとしてのキリストが来られたのは、キリスト者たちをばらばらにしたり、キリスト者だけの孤立した社会を作るためではありません。キリストは、信頼と平和のパン種として人類に仕えるように、わたしたちを送りだされるのです。¹⁹ キリスト者たちが、目に見えるひとつのコミュニケーションとなることは、それ自体が目的ではありません。そのようにして、人類のただ中で、この御言葉を示すひとつの徴しるしとなるためです。——「あなたがたは、地の塩である。」²⁰

十字架と復活によって、キリストはすべての人間の中に、新しい連帯を確立されました。互いに敵対するグループとなった人類の分裂は、キリストの内にすでに克服されています。キリストの内に、すべての人がひとつの家族にされたのです。²¹ 神との和解は、人と人との和解につながります。²²

¹⁹ パン種として仕えるということは、社会から人間性を奪うすべてのものと反対の道を選びとることをたしかに意味します。しかしそれは、世界のさまざまな文化と、またそれぞれの時代の伝統と、つねに敬意をもって建設的に対話をしてゆく姿勢です。「パン種は練り粉に近づくまではその力を現さない。近づくだけではなく、練り粉と混ぜ合わせられ、そしてとうとう練り粉と見分けがつかなくなったときに力を現す。」(聖ヨハネ・クリュストモス『マタイによる福音書に関する説教 46』)

²⁰ マタイによる福音書 5:13

²¹ キリストはこう述べられました。「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」(ヨハネによる福音書12:32) そして使徒パウロはこう告げています。「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。」(ガラテヤの信徒への手紙 3:28)

²² エフェソの信徒への手紙 2:14-18を参照。キリストは、神の民と他の人々を分断している壁を打ち砕かれます。それによって、すべての人に神への道が開かれるのです。連帯は、ひとつの家族や国家にとどまることはありません。それは、特定の地域や特別な関心という枠をすべて超えて行き渡ります。

しかし、もし塩がその塩気を失うとしたらどうでしょうか.....。キリストのこのメッセージに、しばしば耳を閉ざしていることを、わたしたちキリスト者は認めねばなりません。実際のところ、わたしたち自身が分裂したままでいながら、どうやって平和の光を放つことができるというのでしょうか。

今こそわたしたちは、愛と平和というこの福音のメッセージに新たな活力を与えるべき歴史の転機を迎えています。わたしたちは、できることすべてを行おうとしていますでしょうか。——それによって、意見の相違から自由になって、この福音が本来の単純素朴さの内に輝きわたることができるように。

同じ信仰を持たなくとも心を尽くして真理を探求している人々と、その人々に何も押し付けることなく、一緒に歩いてゆくことができるのでしょうか。²³

新しいかたちの連帯を創りだし、信頼の道を開こうと模索するとき、今も、そしてこれからも、そこには試練が待っています。ときにそれは耐えられないほどの試練のように感じられるかもしれません。そのときは何をすべきでしょうか。個人的な試練においても、他の人が直面している試練においても、わたしたちは、さらに愛するという道に呼ばれているのではありませんか。

f. Alois

²³ たとえば、こんな問いを分かち合うことができるでしょう。「人生の意味は何か。人生で進むべき道を示してくれるものは何か。どんな目的がわたしの存在に一貫性をもたらすのか。」

2015年： 新しい連帯のための集い

これから3年半にわたって、「地上における信頼の巡礼」は、新しい連帯のために、この手紙のテーマを实践する道を模索してゆきます。

信仰をもつ者であるか否かにかかわらず、平和を求め旅人、真理に向かって歩く巡礼者をつなぐことができる新しい連帯。

この3年半を通して、あらゆる国々の若者たちが力を注ぎ、あこがれ、直感および経験を分かち合ってゆくことが可能となります。

2012年： 人々の間に信頼の道を開いてゆくこと
2013年： 神への信頼の源泉を発見してゆくこと
2014年： キリストを愛するすべての者の間に、
目に見える交わりコミュニケーションへの道を模索してゆくこと
2015年： 「地の塩」となってゆくこと

そして、この模索を振り返り、さらなる前進を求めて.....

2015年8月

テゼで行われる新しい連帯のための集い

テゼ共同体の75周年記念

ブラザー・ロジェ生誕100周年記念

できるだけ多くの若者に耳を傾けることができるようにこの集いは、大陸ごとに分かれたミーティングで準備される予定です。